

「全学共通カリキュラム」自己点検・評価にあたって

本学は、自己点検・評価委員会において、年度ごとにテーマを定め、自己点検・評価を行うこととし、2010年度末から2011年度にかけて、一年間を費やして「全学共通カリキュラム」の自己点検・評価を実施いたしました。

本学現代教養学部の学士課程の教育課程は、「全学共通カリキュラム」と「学科科目」の二つの柱から成り、「全学共通カリキュラム」は五つの科目群によって構成され、学生が広範な知識を修得し、教養人としての資質を向上させ、全人的成長の土台を築くことを目的として設置されています。今回は、自己点検・評価委員会が、全学共通カリキュラム運営委員会において行われた検証について報告を受け、「全学共通カリキュラム」全体の枠組、各科目群の配置及び科目設置の妥当性を、この目的に照らして点検・評価いたしました。点検・評価の結果をここに取りまとめましたので、ご報告いたします。

来る2013年度には、今回の自己点検・評価の結果を踏まえ、本学の教育理念である「キリスト教を基盤とした女性の自己確立とキャリア探究の基礎を築くりベラル・アーツ教育」を一層推進し、女子大学としての特色を活かすべく、「全学共通カリキュラム」の改編を行うこととします。

今後も引き続き、本学に集う学生諸姉に充実した教育内容を提供できるよう、全教職員一つとなって改善を重ねていきたいと存じます。

この度の「全学共通カリキュラム」の自己点検・評価報告書をご高覧いただけましたら幸いです。

2012年9月

自己点検・評価委員長
(学長) 眞田 雅子

目 次

全学共通カリキュラム(全体)について

点検・評価項目 1

全学共通カリキュラム全体の教育目標、教育課程（科目群の編成）は、現代教養学部の教育理念に適合しているか。 1

点検・評価項目 2

全学共通カリキュラム全体の教育目標、教育課程（科目群の編成）は、教員、学生、外部に対して明示的にキーワードを持って述べられているか。 2

点検・評価項目 3

現代教養学部が養成する人材像を達成するカリキュラムになっているか。 3

点検・評価項目 4

各科目群（共通科目、外国語科目、情報処理科目、健康・運動科学科目、キリスト教学科目）は教養教育の観点から科目の編成・教育内容がバランスよく整備されているか。 5

点検・評価項目 5

初年次教育が適切に行われているか。

全学共通カリキュラムの中で、初年次教育がどのように位置づけられているか。学科科目が担う部分と全学共通カリキュラムが担う部分は明確か。 6

各科目群別の自己点検・評価

点検・評価項目 1

各科目群の教育目標は、全学共通カリキュラム全体の教育目標に適合しているか。明示的に述べられているか。 8

点検・評価項目 2

上記の点検を踏まえ、教育目標を達成するためのカリキュラム構成になっているか。 9

（別 添）

東京女子大学 全学共通カリキュラム自己点検・評価報告書

自己点検・評価委員会

全学共通カリキュラム(全体)について

点検・評価項目1(全体):

全学共通カリキュラム全体の教育目標、教育課程(科目群の編成)は、現代教養学部の教育理念に適合しているか。

【現状の説明】

大学全体および現代教養学部の教育理念は、キリスト教を基盤としたリベラル・アーツ女子教育を通じて、「広い識見と創造性を有し、専門性をもつ教養人として、現代社会の多様な課題を主体的に解決しうる人物の育成を目的とする」と学則に定められている(学則第3条第2項参照)。とくに、本学部では、この教育理念の上にならって、国際化、高度情報化、少子高齢化が進み、共生社会の推進が求められる時代の要請に応えて、「内外の様々な分野で、活躍できる専門性、国際性、豊かな教養を備えた女性、専門性を持つ教養人の育成を目指した、女性の自己確立とキャリア探求をサポートするリベラル・アーツ教育」を推進する(『自己点検・評価報告書』より2010年3月刊行、以下『自己点検・評価報告書』とする)ことを目指している。

一方、全学共通カリキュラムの教育目標は、「多面的履修を通して、基礎的な学習能力を養うとともに、人間・社会・自然に対する理解を深め、専門領域を超えて問題を探求する姿勢を身につけること」であり、これにより広範で多様な知識と基本的な学習能力の獲得を通して(2011年度「履修の手引」より)「全人的成長、教養人としての資質の向上」(同「履修の手引」より)を目指している。

【点検・評価、長所・問題点】

1. 現在の全学共通カリキュラムの教育目標と、専門性を持つ教養人の育成を目指す大学・学部の教育理念・目的との間に齟齬はない。
2. 大学・学部の教育理念・目標の特色である、「キリスト教主義および、女性の自己確立とキャリア探求をサポートするリベラル・アーツ教育」(『自己点検・評価報告書』、学部設置の理念)について全学共通カリキュラムの教育目標のなかで言及されていない。

【将来の改善に向けた方策】

キリスト教主義および、「女性の自己確立とキャリア探求をサポートするリベラル・アーツ教育」(『自己点検・評価報告書』より)については、全学共通カリキュラムも重要な役割を担っている。従って、全学共通カリキュラムの教育目標に、建学の理念・キリスト教について学ぶこと、「女性の生きる力」を与えること、共生社会の推進への理解を深める等、本学の特色を表す文言を加える。

教育課程(科目群の編成)について:

【現状の説明】

全学共通カリキュラムの教育課程の編成は、「専門性をもった教養人」を育成するという大学の教育理念・目的(学則参照)および、「女性の自己確立とキャリア探求をサポートするリベラル・アーツ教育」(『自己点検・評価報告書』より)という学部の教育目標に沿って編成されたものである。外国語科目、情報処理科目、健康・運動科学科目の必修科目により本学で学ぶための基本的学習能力を育成し、「共通科目」により、専門領域を超えて履修の幅を広げ、多面的学際的視点を育成する。これにより、教養教育の目的を達成するよう構成されている。キリスト教学科目は、建学の精神、本学の教育基盤である、キリスト教について学ぶために設置されている。

【点検・評価、長所・問題点】

1. 現在定められている科目群編成は、現代教養学部の教育理念、全学共通カリキュラムの教育目標に沿ったものと考えることができる。外国語科目、情報処理科目、健康・運動科学科目は、基本的な学習能力の育成を目標とし、必修科目を設置している。学習の幅を広げる履修については、共通科目、各科目群の選択科目がその役割を担っている。キリスト教学科目は、本学の教育理念を担う科目であり、必修および選択必修科目、選択科目を設置している。
2. 大学・学部の教育理念・目的の特色である「キリスト教主義、女性の自己確立とキャリア探求」の教育を、全学共通カリキュラムを構成する各科目群の教育課程が、それぞれどのように担っているのかが不明瞭である。学生にわかりやすく提示することが求められる。

【将来の改善に向けた方策】

「専門性を持つ教養人」に加え、キリスト教主義、女性の自己確立とキャリア探求(『自己点検・評価報告書』)を担う科目群を分かりやすく編成する。東京女子大学の特色を示す科目の枠組みを検討する。

点検・評価項目2(全体):

全学共通カリキュラム全体の教育目標、教育課程(科目群の編成)は、教員、学生、外部に対して明示的にキーワードを持って述べられているか。

【現状の説明】

2011年度の「履修の手引」には、本学部の全学共通カリキュラムの教育目標は、「全学共通カリキュラムの多面的履修を通して、基礎的な学習能力を養うとともに、人間・社会・自然に対する理解を深め、専門領域を超えて問題を探求する姿勢」「広範で多様な基礎的知識と基本的な学習能力」を獲得することにあり、これを具体化するために、5つの科目群を置いていると記されている。これらは、カリキュラム・ポリシー第1項やディプロマ・ポリシー第1項とも整合している。

【点検・評価、長所・問題点】

1. 全学共通カリキュラム全体の教育目標、教育課程(科目群の編成)は、教員、学生及び学外に対して公表されている。

2. 記述の内容は、幅広い教養、基礎的学力、学習方法習得について述べられているが、大学・学部の教育理念・目的である、キリスト教主義、女性の自己確立などのキーワードが含まれていない。各授業科目において、どのように大学・学部の教育目的が達成されるのかが把握できるよう、本学の教育の特色を示すとともに、明晰な記述が求められる。加えて、教育目標やカリキュラム・ポリシー第1項には、「広範で多様な基礎的知識と基本的な学習能力の獲得のため・・・」と記されている。しかし、全学共通カリキュラムは、学部教育の前期教育としての「基礎的知識」の習得のみを目的としているのではなく、リベラル・アーツの理念に立ち、4年間にわたり、教養を深めていく楔型履修を目指している。従って、この記述は適切とはいえない。

【将来の改善に向けた方策】

全学共通カリキュラムの教育目標を本学の教育理念に照らして、わかりやすく端的に明示する。
点検・評価項目1 [将来の改善に向けた方策]参照。

点検・評価項目3(全体):

現代教養学部が養成する人材像を達成するカリキュラムになっているか。

【現状の説明】

現代教養学部の養成する人物像は、本学部の理念を定めた学則の条項に、「広い識見と創造性を有し、専門性をもつ教養人として、現代社会の多様な問題を主体的に解決しうる人物」と明記されている。既述の通り(点検・評価項目1(全体)【現状の説明】)、『自己点検・評価報告書』には、その理念について、国際化、高度情報化、少子化などによって生ずる現代の諸問題と向き合い、共生社会の推進という時代の要請に応えるべく、「内外の様々な分野で、活躍できる専門性、国際性、豊かな教養を備えた女性、専門性をもつ教養人」を育成するとともに、「女性の自己確立とキャリア探求をサポートする」と説明されている。ディプロマ・ポリシーにも、本学で身につけるべき能力が記されている。現在の全学共通カリキュラムは、全体としてこのような人材養成の目的を達成するために、下記の科目によって編成されている。

共通科目:4つの領域を設けて、人間・社会・自然に対する理解を深めるとともに、女性学・ジェンダー的視点に立つ科目を展開して、女性の自己確立をサポートするリベラル・アーツ教育を進めている。

キリスト教学科目:本学の建学の精神を担う科目として設置されている。

外国語科目:第一外国語として英語を、第二外国語としてドイツ語、フランス語、スペイン語、中国語、韓国語を、これに加えギリシア語・ラテン語を設置し、大学における学習に必要とされる語学力を習得させるとともに、外国語によるコミュニケーション能力、表現力を習得し、これを基礎に国際社会、多文化への理解を深めることを目指している。

健康・運動科学科目:身体運動に関する知識と実践を融合して学ぶために設置されている。

情報処理科目:現代の情報化社会で必要とされる情報処理の基礎能力と情報倫理を習得するために設置されている。

これらの科目群から総合的に履修することにより、上記の人材養成の目的を達成するよう構成されている。

【点検・評価、長所・問題点】

現在の全学共通カリキュラムに設置されている科目群を適切に履修することで、全体として本学部の人材養成の目的を達成することを企図している。しかし、各科目群は並列的に設置され、本学の教育理念および本学部の人材養成のどの部分を、どの科目群が担っているのかが明確ではない。

共通科目：履修の幅を広げ、多様な知識、多様な視点からの考察などを学ぶことで教養を深めることを目標とし、本学の特色として、その中に女性学・ジェンダーに関連する科目が多く設置されている。しかし、学部の目指す人材養成とのつながりを、より明確に説明する必要がある。

キリスト教学科目：履修の意義が、建学の精神・教育理念との関わりから十分に説明されているとは言い難い。

外国語科目、情報処理科目、健康・運動科学科目：ディプロマ・ポリシーに掲げる「批判的・論理的思考力」「表現能力」「コミュニケーション能力」を総合的に身につけるカリキュラムとなっているが、個々の能力と個別の科目とのつながりが明確でない。

【将来の改善に向けた方策】

1. 学生から見て学部の人材養成の目的のどの部分をどの科目群が担っているのかが明確になるようにカリキュラムを再考する。建学の精神、学部の教育理念とその特色を表すような科目群、領域を設定する。
2. 現行のカリキュラムでは、科目群を並列的においているが、教育目標を踏まえて科目群を大きく括り、どのような能力やスキルを培うかを明示する。学生が各科目を学ぶ意義が理解できるようにする。
3. 社会人として持つべき汎用的能力を備えた人材養成を担う科目群を設定し、備えるべき能力とそれを育成する科目との関係を再構築する。例えば、学科の系統的な学びをさらに応用・展開する力、専門領域を超えて問題を探求する力、コミュニケーション能力などを備えた人材をどの科目群で育成するかも明確にすべきである（一つの能力が一つの科目群とは限らない）。
4. 現代社会で本学の教育理念を生かすには、「共生社会の推進への深い理解」を人材養成の目的に加えることも考えられるのではないかと。また、「資源、エネルギー、原子力、社会保障、経済、国際関係、生態系、情報通信」など現代社会に欠かせないテーマは学生にとっても有意義である。
5. 東京女子大学として、必ずこれだけは身につけさせたいと考える科目を「コア科目」として明示することも考えられる。本学での学びに必要なとされる内容・学習方法を自覚的に身につけさせる。従来は、各科目群について、教育課程表のみで必修及び選択必修と示しただけであるが、単位のとらせ方は同じであっても「コア科目」として括ることで、学生に履修の意義や位置づけを明確にできるのではないかと。
6. 学生の表現力・コミュニケーション力について、外国語のみならず日本語表現についても能力の不足が指摘されている。現行の共通科目に日本語能力を養成する科目が置かれているが、全学的な観点から、日本語表現の養成をはかる科目の設置を検討する必要がある。

点検・評価項目4(全体):

各科目群(共通科目、外国語科目、情報処理科目、健康・運動科学科目、キリスト教学科目)は教養教育の観点から科目の編成・教育内容がバランスよく整備されているか。

【現状の説明】

各科目群の必修要件が全体に占める割合は下記の通りである：

卒業に必要な最低単位数 130 単位の内訳：

小数点以下四捨五入

共通科目	16 単位	12%	} 合計 38 単位 (29%)
第一外国語	8 単位	6%	
第二外国語	4 単位	3%	
情報処理科目	2 単位	2%	
健康・運動科学科目	2 単位	2%	
キリスト教学科目	6 単位	5%	

学科科目(人文) 64 単位 50%

(国際) 64 単位 50%

(人間) 64 単位 50%

(数理) 72 単位 55%

自由選択科目(人文) 28 単位 22%

(国際) 28 単位 22%

(人間) 28 単位 22%

(数理) 20 単位 15%

卒業に必要な 130 単位のうち、文系学科では学科科目が 5 割を占め、全学共通カリキュラムの必修単位数がほぼ 3 割、自由選択科目(必修を超えて履修した全学共通カリキュラムの単位数はここに含まれる)でおよそ 2 割の単位数を履修することになる。学科科目 5 割に対して、必修・選択必修を含めて少なくとも 3 割は全学共通カリキュラムを履修することになる。自由選択科目としての履修を加えると全学共通カリキュラムからの履修単位数は、実際は 4 割前後と推定できる(『自己点検・評価報告書』48 頁の表などから)。

【点検・評価、長所・問題点】

学科科目と全学共通カリキュラムの履修単位数について：学科科目との履修単位のバランスについては、学科科目履修の比重がやや大きくなっているが、これは学生に身につけさせるべき専門性、卒業論文を必修で課していることからいって妥当であろう。

全学共通カリキュラムのなかでの履修単位数について：教養教育として幅広い履修を求めており、共通科目の選択必修単位数を 16 単位としている。外国語科目については、リベラル・アーツ教育における外国語コミュニケーション能力、多文化理解への重要性の認識から第一外国語 8 単位必修、第二外国語 4 単位選択必修としている。キリスト教学科目では建学の精神であるキリスト教

への理解を深めるために、キリスト教を学問として基礎から学び、そこからより深く人間観、世界観との関わりを理解するために6単位履修する。情報処理科目、健康・運動科学科目については、それぞれ大学教育で身につけるべき情報処理の基本的知識と能力および、健康と身体運動への基本的理解と実践のために2単位を必修としている。各科目の位置づけ、履修の意義の明確化は検討を要する。

専兼比率について：共通科目における、専兼比率は、専任3割から4割、兼任6割から7割程度である。しかし、担当学生数からみた場合兼任講師の割合が高くなる傾向が見える。専任教員による責任ある教育体制の強化が望まれる。

【将来の改善に向けた方策】

全学共通カリキュラム必修要件は今後も維持するが、各科目群の位置づけ、履修の意義の明確化は検討を要する。リベラル・アーツ教育は本学の教育の根幹であり、その重要な部分を担うのが全学共通カリキュラムであるならば、専任教員全体で責任を持ってこれを担うことが望まれる。

点検・評価項目5(全体)：

初年次教育が適切に行われているか。

全学共通カリキュラムの中で、初年次教育がどのように位置づけられているか。学科科目が担う部分と全学共通カリキュラムが担う部分は明確か。

【現状の説明】

現行のカリキュラムでは、レポート作成、文献検索など初年次教育は主に、学科の1年次演習で行われている。全学共通カリキュラムにおいても1年次から履修する科目においては、それぞれの学問の導入になるような内容を含めながら行われているが、高大接続の観点から初年次教育の位置づけが曖昧である。

外国語科目、情報処理科目では、1年次の必修として、大学での学習に必要な語学力、情報倫理、技能を身につけさせている。また、共通科目に「文章表現法」を置き、日本語による論理的な文章の書き方を学べるようにしている。しかし、「文章表現法」は選択科目であるため、全学生に対して履修の機会が十分に与えられていない。(全学生に配付の「履修の手引」にレポート作成上の留意点や基本形となる構成等を掲載している。)

【点検・評価、長所・問題点】

外国語科目、情報処理科目の1年次の必修においては、到達目標を設定し、それに沿った授業が各クラスで実施されている。「文章表現法」については、例年、履修者希望者が多く、履修者を制限せざるをえない現状にある。多くの学生が論理的な文章の表現力を向上させたいと望んでいることがうかがわれる。初年次教育は、学科において、それぞれの専門的な学習の導入としても行われているが、全学共通カリキュラムにおいても、初年次教育の位置づけを明確にし、基礎的能力や学習スキルを養う必要がある。

【将来の改善に向けた方策】

本学の教育目標を実現するために、初年次で必ず身につけるべき内容を習得する授業科目を設定し、学生に明示する。これにより、大学で学ぶための知識・能力、学習方法を自覚的に身につ

けさせる。全学科・全専攻の1年次の学生に4年間の学習の基盤となる基本的な学習能力を等しく培う。

1. 現代教養の基礎となる学習能力を身につける。

- ・1年次必修科目の到達目標をより明確に示すことにより、授業の密度を濃いものとし、英語力の強化へと繋げていく。

- ・日本語力の強化

学生の高いニーズに応え、専門教育とも関連づけながら必要な教育内容を吟味し、強化を図る。

- ・情報処理教育の内容の充実

情報処理科目の点検・評価を踏まえ、教育内容の充実を図る。

2. 学習方法を自覚的に身につけさせることが重要である。従って、教室外学習をとおして、自ら学習する姿勢を培い、2年次以降ツールを活用しながら自ら進んで学習できるよう指導する。

- ・全学共通カリキュラムに限らず、学部教育全体にわたる問題であるが、教室外学習の少なさが、速やかな対応を要する問題として指摘されている。全授業科目について、教室外学習の充実を図ることはもちろんのことであるが、特に全学共通カリキュラムの必修科目については、十分な教室外学習の仕方を学生に教示し、徹底しなければならない。教室外学習の指示方法については、FD活動の一環で行うことも考えられる。

3. 全学共通カリキュラムの必修科目を、大学での学びの基礎となるよう「コア科目」として位置づける。本学が考える「現代教養」が明確になるように設定する。その際、教育内容を教育目標に沿って明確にする必要がある。

4. 「女性の生きる力」というトピックをキーワードに、多様な現代社会の変化に対応できるような能力を培う科目、領域の設定を検討する。共通科目の抜本的な見直しが求められるが、文系、理系の学生を問わず必要な知識を身につけさせるよう、自然科学系、人文科学系、社会科学系の科目のバランスに留意する。

5. キリスト教学科目について

全学共通カリキュラムの中でキリスト教学科目はコア科目の一つである。本科目群は、現代の諸問題に即して学生の実質的な教養の涵養にどのように活かせるかを見直す時期にきている。特に1年次においては、学生一人ひとりに本学の歴史や建学の精神を理解させ、キリスト教について学ぶ意義を理解し、キリスト教をとおして現代社会との関わりを理解させていく。

各科目群別の自己点検・評価

点検・評価項目1(全科目群共通):

各科目群の教育目標は、全学共通カリキュラム全体の教育目標に適合しているか。明示的に述べられているか。

【現状の説明】

各科目群の教育目標は、巻末の別添参照。

共通科目は自然科学、人文科学、社会科学の諸分野にまたがる「自然と生命」「人間と思想」「文化と芸術」「歴史と社会」という4領域を置き、教育目標である「柔軟な学問的視野と広い社会的視野を培う」ためのカリキュラムを構成している。全学共通カリキュラムの目標である「全人的成長の基礎を築くとともに、教養人としての資質の向上と広範な知識の獲得を目指して」という点に寄与している。

第一外国語の教育目標は、全学共通カリキュラムの「本学の学習に必要な基礎的学力、学習方法を習得」という教育目標に沿って、高校までに学んだことを土台に、「実践的な運用能力を育成するとともに、学問研究に必要な語学力を養うこと」を目標としている。

第二外国語の教育目標は、全学共通カリキュラムの教育目標を達成すべく「世界の文化や社会の多様性を知るために、英語以外の言語」を習得することを主軸とし、「中・上級については、各学科専攻の履修に際して必要な外国語の基礎力を養う」、「異なった言語文化の多様なあり方に接することによって、高度な一般教養を養う」と定められている。

情報処理科目の教育目標は、「情報通信化社会で必要とされる基礎的な技能と概念および情報倫理を習得し、問題分析能力や問題解決能力を養う」としている。これらの技能や概念・知識は、全学共通カリキュラムの教育目標にある「本学の学習に必要な基礎的学力、学習方法を習得する」ことに寄与している。

健康・運動科学科目は、講義科目を通じて、「身体に関する科学的な知識を習得し、学問的な思考態度を養う」、実技科目においては、「身体運動の実践を通して豊かな感性を培い、身体的教養を身につけること」を教育目標としている。これは、全学共通カリキュラムの「全人的成長の基礎を築く」という目標に沿って設定している。

キリスト教学科目は、キリスト教学科目の履修を通じて「キリスト教をとおして、生命観・死生観、環境問題などの世界や人生についての現代の諸問題を考察する姿勢を養う」、「キリスト教を基盤とする人格形成を担う科目群のひとつとして、人生、思想、文化、女性学等々の諸問題を深く考察する姿勢を養う」ことを目指している。これは、全学共通カリキュラムの教育目標の「専門領域を超えて問題を探究する姿勢を身につけること」に応えるものである。

【点検・評価、長所・問題点】

共通科目、第一外国語、第二外国語、情報処理科目は、全学共通カリキュラムの教育目標に適合している。しかし、各科目群の教育目標は、これらの科目群の履修によってどのような知識・能力が養われ、学習成果がどのようにあがるのかが十分に明示的になっていない。

健康・運動科学科目については、「身体運動の実践を通して身体能力の向上をはかり豊かな感性を養う」という教育目標は、「全人的成長の基礎を築く」という全学共通カリキュラムの教育目標につながっているものの、「学問的思考態度を養う」や「身体的教養」という文言は、全学共通カリキュラムの教育目標との整合性をはかることを意識するあまり、健康・運動科学科目の履修を通じて、具体的に何が習得できるのかが不明瞭となっている。

キリスト教学科目は、キリスト教の基礎を学び、これを踏まえて、さらにキリスト教の視点から自分たちの生きている社会を考察する視座を提供することを意図している。しかし、現行の教育目標は、これらの意図を適確に反映しているとは言い難い。建学の精神を踏まえてキリスト教を学ぶこと、様々な視点からのアプローチを提供することで、学生が何を習得できるのかが、具体的に示されていない。

【将来の改善に向けた方策】

共通科目、第一外国語、第二外国語、情報処理科目の教育目標については、現状でも適合しているが、全学共通カリキュラムとしての各科目群の位置づけを明確にし、それぞれの担う役割を学生にわかりやすく提示することが必要である。各科目群で養うべき知識や能力、スキルを具体的に学生に示すことが求められる。特に共通科目については、複数の領域で構成しているため、領域ごとの教育目標についても共通科目の履修を通じて養われる知識等を明確に提示する必要がある。

健康・運動科学科目については、女性が健康に生きるために必要な身体機能を理解し、より良い生活習慣を身につけること、生涯を通じて必要となる身体への関心を喚起できる教育目標に再設定する。キリスト教学科目についても基礎的な知識の習得とともに、現代の社会が抱えている問題にどれだけ深く考えていけるか、そのために教育目標を学生にわかりやすく示すことが求められる。

点検・評価項目2

上記の点検を踏まえ、教育目標を達成するためのカリキュラム構成になっているか。

【現状の説明】

共通科目は、1年次から4年次までの全学生を対象とし、自然科学、人文科学、社会科学の諸分野にわたる4領域のほか、「演習」と「海外教養講座」を置き、共通科目の教育目標である「柔軟な学問的視野と広い社会的視野」を培っている。現代教養学部の共通科目必修要件は16単位で、4領域から1科目2単位ずつの履修を課し、残り8単位は各自の学習目標に沿って履修させている。「演習」と「海外教養講座」は共通科目の必修16単位には含めていない。

4領域に豊富な科目をおいているが、学科(専攻)の専門基礎に相当し内容が重複する科目(「統計学入門」、「社会学入門」、「心理学入門」、「比較文化入門」等)もあり、所属学科(専攻)の専門分野の科目を履修して必修要件を満たすことが可能となっている。

入門、応用及び特論といった科目が設置されているが、相互の連関は明示的ではない。また、通年履修を意図した緩やかな段階制()の授業科目が4領域に7科目設置されている。

2003年度の教育課程改正時に文理学部と現代文化学部の授業科目を統合し、共通科目は学部ごとに同内容の授業科目を開講するという重複を避け、両学部の学生に多様な科目を提供することを目指し、現在のカリキュラムの形となった。2009年度の現代教養学部開設時には、さらに重複科目の整理を行い28科目について統廃合を行い、「日本語技法」など、点検・評価の結果に基づ

く新たな授業科目を設置した。

第一外国語は、「Communication Skills A・B」では“developing listening skills, and understanding and using the basic elements of conversation”に力点を置き、「Discussion Skills A・B」は“the ability to interact in discussions”に力点を置く(シラバスより)。一方、「Reading A・B」「Reading A・B」の2科目は、「大学で学ぶ専門領域の文献を英語で読む上で必要とされる基礎的な言語技能の習得」(シラバスより)をうたい、それぞれが科目群の教育目標に掲げる「実践的な運用能力」と、「学問研究に必要な語学力」の育成を担っている。選択科目においても「Reading and Discussion A・B」「Writing A・B」「Speaking A・B」等のネイティブスピーカーが担当する科目を多数配置している。「読む・書く・聞く・話す」能力を身につけさせる豊富な科目を配置している。

第二外国語は、学則の「女子に高度の教養を授け、専門学術を教授研究し、もって真理と平和を愛し人類の福祉に寄与する人物の養成」と、カリキュラム・ポリシーの「基本的な学習能力」、「女性の自己確立とキャリア探究の基礎」の獲得を目指して、ドイツ語、フランス語、スペイン語、中国語、韓国語の初級(必修)、初級選択(選択)、中級(選択)、上級(選択)を置いている。言語運用の基礎を積み上げるとともに、上級では、専門的な要求にも耐えうる高度な語学力を習得することを目指している。

情報処理科目は、必修科目の「コンピュータ」で、本学のコンピュータを利用するためのもっとも基礎的な技術や知識を学ぶ。さらに、選択科目として「コンピュータ」「コンピュータ」を全部で14科目置いている。プログラミング、マルチメディア、UNIXリテラシなど、豊富な内容を提供している。学生はこれらの履修によって、自分の学業に必要とされる技術・知識を習得し、様々な課題を分析・解決する能力を身に付けることを可能としている。大学における学習だけでなく、卒業後の就業においても必要となるコンピュータに関する技術や知識が習得できるようなカリキュラムを編成している。

健康・運動科学科目は、必修科目として1年次には、身体観、健康観の基礎を築くために「健康・運動科学基礎実習」と「健康・運動科学基礎実習」の2科目、2・3・4年次には、1年次科目を基盤に選択科目を設置している。なお、選択科目には講義と実習を置いている。

キリスト教学科目は、「キリスト教学Ⅰ(入門1)」「キリスト教学Ⅰ(入門2)」において、キリスト教の教典である旧約・新約聖書を1年間かけて学ぶ。「キリスト教学」は、11科目設置しており、キリスト教への様々な方向からのアプローチが可能としている。「キリスト教学」は、3科目設置し、「キリスト教学」で学んだことをさらに発展させた内容を取り扱っている。

【点検・評価、長所・問題点】

共通科目については、学科(専攻)の専門基礎に相当し内容が重複する科目もあり、所属学科(専攻)の専門分野の科目を履修して必修要件を満たすことができる。実際に2010年度履修者数の学科(専攻)比率を検証すると、特定の学科(専攻)の学生が50%以上を占める科目があったが、所属学科(専攻)の専門分野と内容が重複する科目であった。共通科目の教育目標である「柔軟な学問的視野と広い社会的視野を培う」という点からも望ましいことではない。

日本語力を実践的に涵養する科目を置いているが、学科・専攻からは、学生の日本語力低下について懸念が示されており、全学的視点から改善に取り組む必要がある。

また、通年履修を意図した緩やかな段階制()の授業科目が4領域に7科目設置されているが、最近過去3年間(2008~2010年度)の平均履修者数を検証すると、すべての科目で後期の履修者数を大幅に減らしている。科目配置について検討を要する。

共通科目において学科科目との相互補完的な学習の深化が可能となるよう、履修の段階制のあ

これにともない、既存の選択科目のカリキュラムの見直し、改編を行う。

情報処理科目は、特に科目の種類や分野に偏りはない。しかし、科目によって、履修者が関連する学科の科目を専攻する者に偏る傾向が認められる。文科系の学生に対しても、必要な知識やスキルの習得・向上を図るような新科目の設置が必要である。

健康・運動科学科目は、女性の身体や身体活動に関する正しい知識と豊かな感性を培い、より調和の取れた女性の健康についての知識を教養として身につけるための体系的なカリキュラムを構築する。科目名についても内容とともに整理する。

キリスト教学科目は、「キリスト教学」については、聖書学中心の授業から、建学の理念や本学の歴史を理解させ、本学で学ぶキリスト教を学ぶ意義を理解させるとともに、現代の教養に結び付けるような授業への転換が必要である。特に「キリスト教学」については、科目の意義を学生に明確に示し新たな視点からのアプローチを試みることも一案である。

全学共通カリキュラム全体としては、履修者の少ない科目についてはコマの有効利用の点からも設置科目を見直すとともに、わかりやすい科目名、科目間の繋がりも意識したカリキュラムの構築が課題である。

(別 添)

東京女子大学の理念

東京女子大学は、キリスト教を教育の根本方針となし、学問研究及び教育の機関として、女子に高度の教養を授け、専門の学術を教授研究し、もって真理と平和を愛し人類の福祉に寄与する人物を養成することを目的とする。

東京女子大学の教育方針

<教育理念> 東京女子大学は、学生ひとりひとりを大切にし、キリスト教を基盤としたリベラル・アーツ教育を通じて高度の教養と専門能力を授け、真理と平和を愛し人類の福祉に寄与できる女性を養成することを教育の理念として掲げています。

現代教養学部の目的

現代教養学部は、広い識見と創造性を有し、専門性をもつ教養人として、現代社会の多様な課題を主体的に解決しうる人物の育成を目的とする。

全学共通カリキュラムの教育目標

全学共通カリキュラムは、全人的成長の基礎を築くとともに、教養人としての資質の向上と広範な知識の獲得を目指しています。これらの科目の履修を通して、本学の学習に必要な基礎的学力、学習方法を習得するとともに、多角的な視点から専門領域を超えて問題を探求する姿勢を育成しています。

【共通科目】

教育目標

柔軟な学問的視野と広い社会的視野を培い、現代社会のさまざまな状況においても対応できる力を養成する。

【第一外国語】

教育目標

実践的な運用能力を育成するとともに、学問研究に必要な語学力を養う。

【第二外国語】

教育目標

世界の文化や社会の多様性を知るために英語以外の言語を習得する。
中級・上級については、各学科専攻の履修に際して必要な外国語の基礎力を養う。異なった言語文化の多様なあり方に接することによって高度な一般教養を養う。

【情報処理科目】

教育目標

情報通信化社会で必要とされる基礎的な技能と概念および情報倫理を習得するとともに、問題分析能力や問題解決能力を養う。

【健康・運動科学科目】

教育目標

身体や身体運動に関する幅広い知識を修得し、学問的な思考態度を養う。
身体運動の実践を通して豊かな感性を培い、身体的教養を身につける。

【キリスト教学科目】

教育目標

キリスト教をとおして、生命観・死生観、環境問題などの世界や人生についての現代の諸問題を考察する姿勢を養う。

キリスト教を基盤とする人格形成を担う科目群のひとつとして、人生、思想、文化、女性学等々の諸問題を深く考察する姿勢を養う。